

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月26日現在

機関番号：33928

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23730726

研究課題名（和文）大正期における雑誌メディアによる通俗性教育の特質とその影響

研究課題名（英文）RHETORIC OF LOVE IN MODERN JAPAN: RECONSTRUCTING FEMALE SEXUALITY

研究代表者

久保田 英助 (KUBOTA EISUKE)

愛知みずほ大学・人間科学部・講師

研究者番号：50386546

研究成果の概要（和文）：本研究は、通俗性教育の特質を分析するにあたり、「恋愛」論を出発点にして考察を進めた。そこでは、もっぱら「恋愛」の意義を、快感を「要求する」側の男性セクシュアリティから捉え、男性の快楽がどこまでも追及されていた。こうした中で「美人」がもてはやされる社会的風潮が構築されていたが、通俗性教育が規定した「美人」とは、健康的で均整の取れた女性の身体美をそなえた女性のことであり、西洋人の裸体が理想とされた。

研究成果の概要（英文）：Human sexologist arguments had great influence because of its introduction of science and its public character. Instead of the pre-1920 restrained and mute sexuality, the human sexologists called for positive understanding of sexuality and a wide public discussion on this matter. Scientifically, having sexual desire was proved to be healthy and natural. “Love” was regarded as a necessary step to acquire sexual knowledge and to keep a harmonious sexual relationship between a married couple. “Love” was discussed in association with “marriage” and “sexual desire,” and romantic love ideology appeared.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学・日本史

### 1. 研究開始当初の背景

#### （1）背景

日本における性教育の歴史的研究は、山本宣治をはじめとした優れた研究者や教育者らを対象としたものが数多く積み重ねられている。しかし、実際に性教育を行ってきたのは、彼らのような専門的な知識・技能を持った者たちだけであったのだろうか。どのような時代であっても、人々は両親、兄弟、友人、地域の人々など、さまざまな方面から多様な性に関する情報を得ていたはずである。さらに大正期以降において忘れてはいけないのは、マス・メディアからの性情報の取得

である。もちろん、これらの情報は、教育的な目的に基づいて計画的に提供されたものではないことが多い。したがって、教育史はもちろんのこと、教育学の分野ではこうしたテーマを正面から引き受けようとする姿勢は弱かったといえよう。しかし、現在に目を転じれば明らかであるように、多くの若者は、ますます雑誌だけではなくインターネットなど、多様なマス・メディアから多くの情報を得ることで、（悪）影響を受け、（負の）人間形成を行っているという側面を軽視してはいけない。わが国の若者に対する性教育のあり方を考えるにあたって、社会にあふれる

性情報の特質と、それらの若者への影響を把握する必要があることはいまでもない。この場合、メディアによる一連の人間形成作用もまた、一種の「性教育」と捉えることではじめて、これらの課題（いくなれば「メディアによる負の性教育」）を教育学の分野で取り扱うことの意味が浮き彫りになるのである。その意味を認識してはじめて、効果ある性教育の方法を教育学的に研究することができる。これは、歴史的研究においても同様である。歴史にさかのぼり、メディアによる性教育を日本人はどのように受けてきたのか、その問題点を明らかにすることで、性をめぐる問題の本質が明らかになるのである。なお、学校においてではなく、こうした社会の中で通俗的に行われてきた性教育を、本研究では「通俗性教育」と呼ぶこととした。

(2) 研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

1920年代を中心として活躍した通俗性教育者は多数登場したが、特に澤田順次郎、羽太鋭治が群を抜いて人気があった。澤田は『性』・『性公論』・『性の知識』の、羽太は『性欲と人生』の雑誌主幹として活躍したが、実際それらの雑誌はまとまったかたちで保存されておらず、その内容に関してはほとんど明らかにされていない。さらに、両者以外による雑誌はまったくの未発掘状態であるといつてよい。したがって、まずは期間内に、できるだけ多くの未発掘資料を収集するとともに、それらの性情報が描き出していた、男女の関係性を明らかにする。次いで、それらの情報が日本人の男女関係に与えた影響について考察するために、他の大衆雑誌、女性雑誌、各種新聞などの記事、読者投稿欄などから、当時の日本人の性のありようを分析する。

(3) 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

本研究は、男女の関係性に着目したものであるが、その前提として、男性の性のありようを描きだすことが不可欠となる。すなわち、本研究には次の点で学術的な意義があるといえよう。

それはまさに、男性の性の形成過程に着目するという点である。歴史学における性差への着目は、まず女性史研究として現れた。日本の戦後歴史学は、権力者中心史観に代えて、日本人の祖先である人民や民衆を主人公の位置に据えようとした。しかし、日本、日本人を語る研究者の圧倒的多数が男性であったように、そこに登場する人々は性が不問

に付されながら実は男性であった。女性史研究の推進力となったのは、そうした「歴史」における女性の不在に気づいた女性たちである。

さらに近年では、「女性」のみならず「男性」というカテゴリーにも注目が集まるようになり、普遍的な「人」として扱われてきた男性を、「男性性」を備えた存在としてとらえ直す視点が生まれた。しかし、依然として「男性性」研究は、「女性性」研究に比べると、圧倒的に蓄積が少ないといわざるをえず、さらには男女の関係性に焦点を当てたものとしては、慰安婦問題といった戦時に限定されたテーマを除けばほとんど未開拓な状況である。売買春研究についてみても、女性を中心にした研究がほとんどであり、買う側の男性の性に対する関心は薄かったといつてよい。

## 2. 研究の目的

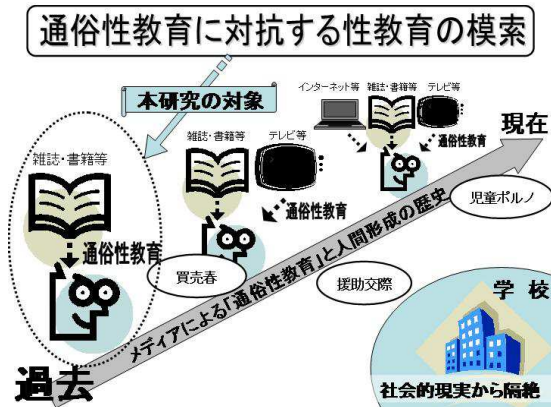
本研究は、大正期における雑誌メディア膨張期において、それらを通じて社会にあふれ出した「性情報」を分析し、

(1) それらの性情報に描かれている「男女の関係性」を明らかにする。

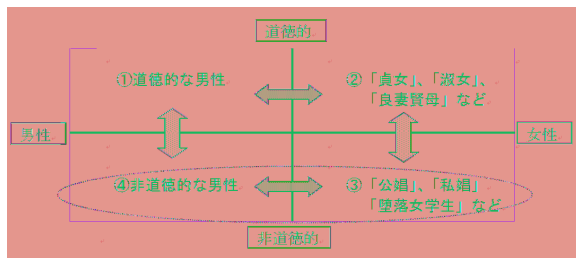
(2) また、それらの情報が日本人の男女関係に与えた影響について考察する。これらの目的は、今日の日本人が必要とする性教育を考察する上で欠かせない史的題材を提示するためである。

(3) また、この研究は従来歴史学的に低く価値付けられ、その多くが失われつつある通俗雑誌の研究価値を確認し、それらを収集・保存するという点でも意義がある。

ところで、大正期における通俗性教育の知識基盤となっている通俗性欲学とは、アカデミズムと大衆向けとの中間に位置する学問のことである。通俗性欲学者と言われる人々は雑誌などを通じて多くの大衆の関心を取り込もうとした。この時代、一般大衆への性知識の啓蒙を目的にした夥しい数の書籍・雑誌が発行され、性に関する言説は社会に相当あふれていた。確かに、山本宣治などによって推進された先進的な性教育研究に対し、大衆の興味に迎合的で、販売の促進を狙った低俗な内容であるなどと批判的にとらえられることもある。しかし、その強い通俗性、すなわち当時の社会的影響力の大きさを鑑みれば、通俗性教育の特徴や意義を考察することは、きわめて重要である。なぜならば、そこには大衆の欲求の形が如実に現れているはずだからである。



### 3. 研究の方法



本研究では、上図のように、当時の人々のタイプを四象限図式を用いて4領域に分類し、当時の男女関係の特質を分析する。なお、X軸を「男性」・「女性」の別、Y軸を性道徳の高低とする。その上で、各領域間の関係を以下の観点から検討する。

- (1) 「①と②の関係、すなわち、正しい男女関係とはどういったものか」
- (2) 「③と④の関係、すなわち、不適切な男女関係とはどういったものか」
- (3) 「②と③の関係、すなわち、道徳的な女性と非道徳的な女性とはどのような点で異なるのか」
- (4) 「①と④の関係、すなわち、道徳的な男性と非道徳的な男性とはどのような点で異なるのか」

雑誌メディアの中で記事を書く主体は自ら①を名乗る男性がほとんどであるといっていよう。したがって、全般的には①「道徳的な男性」の目線を中心に考察し、非道徳な同性に対する目線や、正しい男女関係に対する考え方などを総合的に踏まえ、彼らが④の男性と③の女性との間の「不適切」な関係をどのように捉えていたのかを考察することで、当時の日本人の男女関係のありようを明らかにする。

### 4. 研究成果

本研究は、「通俗性欲学の時代」と呼ばれる1920年代の「通俗性教育」に着目し、通俗性教育の言説の中ではどのような男女の関係性が描かれていたのか、そうした関係性の中で、どのような男女のセクシュアリティが構築されていたのか、という点について明らかにした。具体的には、当時の男性が同時代の女性を眺めるその時の言葉や態度から、男性自身のセクシュアリティを描き出すのである。その際、男女の関係性に注目するに当たり、もっともそれが典型的に表されているといえる「恋愛」論を出発点にして考察した。

本研究を通じて収集した資料は、澤田順次郎の『性』・『性公論』・『性の知識』と秋山尚男の『性と愛』・『性愛』である。なお、通俗性欲雑誌は、国会図書館や各大学図書館、さらには各種の資料館などにもまったくといってよいほど所蔵されておらず、その実態の解明は進んでいなかったが、本稿では、澤田順次郎の雑誌52冊、秋山の雑誌20冊を蒐集した。

通俗性教育において、「恋愛」とは肉体的な快感と同時に「精神的快感」の双方を得ることができるような関係を意味している。また、この「精神的快感」とは具体的には女性の美しい容姿を愛でることによって得られる喜びのようなものであり、性交による肉体的な快感をさらに高める触媒的なものとして捉えられている。このように通俗性教育においては、もっぱら「恋愛」の意義を、快感を「要求する」側の男性セクシュアリティの観点から考察し、男性の快楽がどこまでも追及されているのである。そして「美人」がもてはやされるような社会的風潮が、男性のこうした快楽の面から正当化されるのである。なお、通俗性教育が想定した「美人」とは、健康的で均整の取れた女性の身体美をそなえた女性のことであったが、この身体美とは、西洋の美術、西洋人の裸体がモチーフとなっていたものであった。こうして、女性の「美」の基準、「美」のイメージが、男性の視点から詳細に規定されていったのである。それは一面においては女性の「健康」のためであったと言えるが、その「健康」もまた、男性セクシュアリティの観点から見れば、男性の性的快感を追及する上で要求されたものでもあったのである。

1920年代の次の30年代は、エログロナンセンスの流行語が象徴するように、「性の商品化」の萌芽が見え始めた時代であった。こうした女性の「性の商品化」を促すような男性セクシュアリティの登場は、より充実した快感を得るため西洋の女性をモデルに新しい「美」の形を追求した通俗性教育の成果ではなかったのだろうか。すなわち、1920年代

の通俗性教育は、1930年代における新奇の性産業の流行、女性の身体の商品化の促進をもたらした一つの要因と見ることができるのである。

以上の分析結果を踏まえ、学术界にもたらしたと考えられる本研究の成果と影響を以下に2つまとめる。

(1) 本研究の成果の1つは、メディアによる性情報の提供を「通俗」性教育として位置づけ、教育史学の領域に引き込んだ点である。そして、これからの日本における社会における性教育の進むべき方向性を提示することができたものとする。

(2) 本研究の成果の2つ目は、平成24年8月に開催された「第3回議論学国際学術会議」において数多くの外国人研究者に対して報告し、予想以上の関心を集めたことである。外国人にとって、日本の性の歴史といえば、公娼制度や慰安婦問題などマイナスのイメージが伴ったもの以外、戦前については、ほとんど知られていないのが現状である。こうしたマイナスの側面だけではない、日本における多様な性の歴史を諸外国の研究者や学生に伝え、日本に対する理解を深めることができたものとする。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) 久保田英助・久保田絢、RHETORIC OF LOVE IN MODERN JAPAN: RECONSTRUCTING FEMALE SEXUALITY、Proceedings of the 4rd Tokyo Conference on Argumentation、査読有、4巻、2013年、pp.71-77

[学会発表] (計1件)

(1) 久保田英助・久保田絢、RHETORIC OF LOVE IN MODERN JAPAN: RECONSTRUCTING FEMALE SEXUALITY、The 4th Tokyo Conference on Argumentation、2012年08月10日～2012年08月12日、上智大学短期大学部

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

久保田 英助 (KUBOTA EISUKE)  
愛知みずほ大学・人間科学部・講師  
研究者番号：50386546